

---

# 魔王と勇者と彼らのその後

汀 一穂

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔王と勇者と彼らのその後

### 【Nコード】

N4493W

### 【作者名】

汀一穂

### 【あらすじ】

魔王・享年1000歳オーバー。魔王は勇者に打ち倒され、話はめでたしめでたし、で終わったはずだった。

……だが何故か気付けば現世に戻ってる！？

生まれ変わった3歳児元魔王と外見年齢詐称な勇者の日常を描いた話(?)である。

## 1・プロローグ

闇を写し取ったかのような漆黒の城。

魔王城。

その城を目指し歩く旅人が4人。

城の前に立つ彼らは足を止め、仲間たちと顔をあわせた。その表情は何か決意を秘めたものがあり、一つ頷くと城の中へと入っていた。

漆黒の城の最上階。

その広い玉座の間で相對する者たち。

一方は漆黒の闇をまとった存在、魔王。

もう一方は、勇者とその仲間たち。

光輝く剣が閃く。

黒のマントが翻り、雷光が煌く。

そして最後の戦いの火蓋は、切って落とされた。

## 1・プロローグ（後書き）

1割の思いつきと、もう1割の無謀な挑戦と、残りは暴走という名の無計画さで描かれています。

更新は亀決定ですが、生暖かく見守ってくれたら嬉しいです。

2・魔王の……（前書き）

改訂9/30。

説明を大幅に付け足しました。

## 2・魔王の……

「魔王、覚悟!!」

長い長い時間だった。

どれほどの孤独と絶望の中を生き続けてきただろうか。

そしてようやく、その長い生に終止符を打つべき存在が目の前に現れた。

それが勇者。

人々の希望を背負った者。

人々の憎悪を向けられる私とは真逆の存在。

そして、魔王である私と渡り合うだけの力を持った唯一の存在だ。

けれど彼は一人ではない。

大切な仲間と共に現在、私の目の前にあった。

ここに至るまでの道のりは容易いものでは無かっただろう。

幾多の裏切りもあった。

勇者を利用しようと近づぐ者もいた。

自らの利を優先する者もいたし、已むに已まれぬ理由で近づいた者もいた。

つい先日まで敵であった者たちとも、誤解が解ければ手を取り合った。

彼らはそんな苦難を乗り越え、ようやくここまでたどり着いたのだ。

そんな勇者たちを、私は歓喜と共に迎え撃つ。

これまでの私は、ただそこに存在しただけだった。

かつてこの地には、幾人かの魔王が存在した。

魔の領域を統べる王、それが魔王。



だが私ほど長い時間この座に座した記録は無いだろう。

そして。

私以上にこの地に住まう生き物たちに、より大きな力を与えた存在もいなかっただろう。

それ故に魔物たちは私を王と崇めた。

至高の王、と。

さまざまな思惑を孕みつつも、それらを隠したまま魔物たちは私にひびきをつく。

最初のころは何も考えず、ただ力を与え続けた。

力無い小さな存在のために。

求められるがままに、望まれるがままに力を与え続けた。

この数百年の内、魔物たちはさらに強大な力を得た。

力無き小さな魔物も、そして………もとより力あったものも。

結果、世界は荒廃した。

さしたる意思と言うものを持たない魔物の多くはただ目の前にある障害を排そうと、目の前にある生き物を全て屠っていった。

中位に立つものは、そんな魔物たちを操り世界を蹂躪する。

上位に位置する者達は、私を守ろうとするものと、廃そうとする

もの、そして静観するものとに別れた。

魔王と恐れられあがめられても、所詮は魔物達にとっては道具の一つにしかすぎないのだ。強大な力を得るためだけの。

気付けば私は……一人だった。

孤独な玉座に縛られた、ただの道具。

それが現在の、私の姿だった。

だから望んだ。

私を終わらせてくれる存在を。

私というものに終焉をもたらしてくれる存在を。

そして今、その望みは叶おうとしている。

だが戦いに手を抜くことはしない。

激戦の末、勇者の剣がこの胸を貫く感触が。

ああ……ようやく、自由になれる。

自然と笑みがこぼれ、そして全てが闇に閉ざされた。



## 2・魔王の……(後書き)

誤字脱字、ありましたら報告よろしくお願いします。

3 ・ 目を開ければ・・・「ジャジャ」？（前書き）

最終改訂 1 / 4。

### 3 ・ 目を開ければ・・・「じやじや」?

「は??」

目を開くと、そこには長閑な風景が広がっていた。

目の前に広がる状況に、はっきり言って戸惑いが隠せない。

先ほどまで、というか目を閉じる前まで薄暗い城の最上階にいたはずだ。なのに何故こんな場所にいるのか、それ以上に、ここがどこなのかも分からなかった。

ゆっくりと視線を周囲にめぐらせる。

楽しそうにおしゃべりをしていた村人達は、「おつかれ」と言い合い別れを告げる。

辺りを先ほどまで駆け回っていた子供たちの楽しそうな声は、その子たちを迎える親の声で別れの言葉を告げる。

近くを流れているのだろっ、川のせせらぎの音が聞こえる。

空を見上げれば、どうやら夕暮れ前だろうか。赤く染まったまばゆい世界。

やさしく頬をなでる風に、なびく木々のさざめき。

どこにでもあるような長閑で平和な村の、夕暮れ時の風景が目の前に広がっていた。

よし、落ち着いて現状を把握しよう。

私はかつて魔王と恐れられた存在だ。死んだという自覚はあるから『かつて』で正解……のはず。

死んだ場所はたぶん間違いないく魔王城の最上階。光の聖剣と言われたエクス○リバーなんて目じゃないぜ、ぐらいの強大な力を持った剣で心臓を一突きにされたのだから、あの後あっさり消滅したはずだ。

ちなみに、そんな出鱈目な剣を作ったのは勇者だったりする。暇な時期になんとなくで作る物では無いと思ったのはここだけの話である。

享年1000歳オーバー。正確な年齢を覚えていないからたぶんこのぐらい(でいい)だろう。細かい事は言いつこなした。

感覚的にはついさっきの事のように感じるが、私が死んでからそれなりの時間が経っているはずだ。

そうでなければこれほどまでに、平和を満喫している状況が出来るはずがない。

なぜなら私が魔王としてあの場所にいた当時、それは目も当てられないほど世界は荒廃していたからだ。

そんな荒んだ状況が、1年や2年でこれほどまでに変化するとは思えない。

で、現在の私は？と、じっと手を見る。

小さい。

記憶にある自分の手と比べて見ると、はるかに小さい手だった。けれど確かに生きている。

ぬくもりがある。

頬をなでる風が感じられる。

耳もすっかりと音を捉えている。

瞬きを何度繰り返しても、目の前の光景は幻のように消えはしない。

一体この状況をどう説明するべきかと頭を悩ませながら立ち尽くしている、遠くからこちらに近づいてくる人影に気がついた。

今の状況で、一番見知った者。

私に最後をくれた存在。

勇者。

今の状況を打破してくれるに違いない存在に、私は縋るような視線を向けた。



3 . 目を開ければ・・・「じやじや」(後書き)

誤字脱字「じや」がありましたら報告よろしくお願いします。

#### 4・勇者の現在（前書き）

今回は、魔王を討った後の勇者のその後、魔王と再会（？）まで。  
初会話は次回へ

最終改訂 1 / 4。

#### 4・勇者の現在

魔王を倒すまでの道のり。

それは容易いものではなかった。

出会い、そして別れ。

そして様々な困難に遭いながらも、それらを仲間たちと協力し合  
って乗り越えてきたのである。

あの旅は、一言では言い表せない程のものだった。

けれど現在。

世界は平和を取り戻し、こうして目の前に平和な風景が広がって  
いる。

あの苦労した日々の努力が報われると思える光景だった。

ここは辺境の村、カリスタ。

俺が現在、娘と共に暮らす村である。

魔王との戦いの後、俺はしばらく世界を放浪した。

魔王は魔物達の力の源。  
魔の領域に住まう全てを統べる存在。

その魔王を打ち倒した事によって魔物達の力は大きく削がれ、その脅威が薄れた事で人々の間に活気が生まれた。

だが未だに疲弊し切った世界。  
争い続ける人々。

時には諭し、時には諫め……。  
そうやって世界を数年、巡ったのである。

そんな旅の中で、親密な関係になった相手が全くいなかった訳ではない。

子供も何人が生まれた。  
そして数年前、俺の子供達の中で唯一の娘が生まれた。  
待望の娘の誕生に、俺は喜んだ。

だが、この娘は普通では無かった。

感情というものが無い。  
何かに動ずる事も無い。

はっきりいえば、『魂が存在しない』とでも言った方が早いだろうか。

言われた事はおそらく理解している。だがそれ以上は無い。  
言われるままを繰り返す、ただの生きた人形。

俺はそんな娘と共に暮らすために、静かな村を選んだ。遠い昔に暮らしていた故郷をも思い出せるような長閑な村だ。村人たちも、こんな普通では無い娘を受け入れてくれた。

だが母親である女性は、こんな辺鄙な村で暮らすのが出来なかったため、ここに来て数日でここから出て行った。

それから俺は、娘と二人で暮らし始めたのである。

そうやって暮らしてきて、もうすぐ1年が経とうとしていた。

今日もいつもと変わりなく仕事を終え、俺は家に帰り着いた。

旅をしていた当時を思い出すと、想像できないほど平和な日常だ。

だが、いつもならもうすでに帰ってきているはずの娘の姿が無い。その事に気付いた俺は、慌てて娘を探しに家を出る。

その心配も杞憂だったようで、家を出てすぐに娘の姿は見つかった。

栗色の長い髪をしたいつもの見慣れた後姿だったのだが、その姿にどこか違和感を覚えた。

何かを探すかのように辺りを見回す姿。

何かを考え込むような仕草。

それら全ては、今まで見たことも無い動作の数々だった。

そして何より驚いたのが、こちらを振り返った瞬間顔を輝かせた

その表情だ。

一体何が起こったんだ!?

戸惑いを隠せないまま、俺は娘の下へと向かって行ったのだった。

#### 4・勇者の現在（後書き）

誤字脱字ありましたら報告よろしくお願いします。

## 5・再会（前書き）

サブタイトルは、思い付きでシンプルにつけてます。

最終改訂11/4。  
勇者、長髪です。



## 5・再会

かつて、勇者と魔王として相対した二人。  
時を経て再び相対した。

長閑な村の中心で。

まかり間違っても勇者と魔王である。  
ましてやこの二人に関して言えば、討ったものと討たれたもの。  
本来なら恨み恨まれるものたちのはずなのだ。

そんな過去を持つ二人だったが、対面を果たした二人の間に何か  
をしようという空気は。

一切無かった。

「おお、勇者か。久しぶりだな。あと、年取ったな？」  
記憶にある勇者の姿とあまり変わったように見えなかったがゆえ  
に最後の言葉は疑問系になったが、とりあえず久しぶり（？）の再  
会に当たり障りの無い事を言っておく。  
挨拶は基本だとかつて本で読んだからだ。

「あ、ああ」

その挨拶に対し、勇者はどこか困惑した表情。

あまり変わったように見えない勇者の、あえて変わった部分を挙げるならば、髪が伸びたことぐらいだろう。後ろで一括りにされた長い髪が風に靡いていた。

そんな彼を見上げながら、その見上げる角度が尋常ではない事はスルーした。

気付かないフリだ。突っ込んではいけない要素だ。最後のときは私が彼を見下ろしていたなんて忘れなければいけない事柄なんだ。

「私を討ち取った後、その後はどうしたんだ？かわいい彼女たちの誰かとくっついたのか？」

「ま、まあそんな感じだ」

勇者の顔色が、ますます青ざめた感じになっているが気にしない。たびたび勇者の様子は報告で受けていたし覗き見もしていたから彼らの事情は一応知っている、なんてことは内緒にしておくべき事柄だ。

「それで、子供でも生まれたか？」

「いや、まあ生まれた事は生まれたんだが……」

眉を八の字に下げた勇者の顔がなんだかわい、と思ってみたりしながら質問を続けた。

「で、どこにいる？」

そう言っただけで辺りを見回してみる。こんなにも若いんだ。小さい子がいてもおかしくない。それに記憶にある限り、勇者は子供好きだった……と思う。

辺りを見回す私を勇者はなんとも言えない表情でじっと見つめていた。

首をかしげて見つめ返す。すると何かを決意したように、こちらを真剣な表情で見つめ返し口を開いた。

「………………。今、目の前にいる」

長い沈黙の後に発した言葉に、逆にこちらが黙った。

「……………は？」

「おお、勇者か。久しぶりだな。あと、年取ったな？」

こう言われた瞬間、驚き以上に嫌な予感を覚えた。

今現在、俺を勇者として知るものはこの世界にはほぼいないはずだからだ。知っていたとしてもごく身近な存在、身内か某友人たちだけだ。

それ以上に、娘にそんな話をした覚えも無い。

そして近づいて気付いた事がある。

この気配、というか存在感には覚えがある。

認めたくない事実だ。認め難い現実だ。

だがそれよりも気になることがあった。

何故こんなにも親しげなのだ！？

記憶が正しければたぶん、おそらく、その通りの人物のはずだ。

だが想像どおり記憶に残る人物だとすると、この親しげな雰囲気

だということに納得がいかない。何故ここまでにごやかに挨拶されるのかも、だ。

最後の言葉が疑問系になっていたのも納得がいくが、納得したくない。あまり変わってないと言いたいのだろうが、その言葉は今の俺が一番聞きたくない言葉だった。

「私を討ち取った後、その後はどうしたんだ？かわいい彼女たちの誰かとくっついたのか？」

何故そんなことを知っているんだ、と叫びだしたい気持ちを抑えつつ「ま、まあそんな感じだ」と当たり障りの無い返事を返した。

正直、頭を抱えたい気分だった。

「それで、子供でも生まれたか？」

訂正。この質問には正直泣きたくなかった。何故自分の娘に子供が生まれたか、なんて質問されなくちゃならんのだ。

「いや、まあ生まれた事は生まれたんだが……」

一体どう返事しろと？

「で、どこにいる？」

どこか期待したように問いかける娘の姿。その待ち望んでいたはずの生き生きとした姿だったが、はつきり言って笑うべきか、泣くべきか。

あたりをきよるきよると何かを探す様子を見せる。

……………よし。正直に言わせてもらおう。

「今、目の前にいる」

この言葉にはさすがに相手も黙った。

はっはっは、一矢を報いたぞ。

……嗚呼、と心の中で深い深いため息を一つ。

いっそ、声高らかに叫びたい。

責任者、出て来い~~~~~!!!

と。

## 5・再会（後書き）

誤字脱字を見つけたら報告よろしくお願いします。

6・あれから何年か……（前書き）

勇者の過去（黒）がちよっぴり出てきます。

最終改訂11/4

勇者のぼやき内容微妙に変更。

6 . あれから何年か……

その後、お互い落ち着こうと家路についた。

帰り道は沈黙。

帰り着いてもしばらくの間、沈黙は続いていた。

それも当然の事だろう。

落ち着いたからといってこの状況が何なのか、お互い説明が出来なかったからだ。

テーブルを挟んで向かい合って座っていたが、ただじっと椅子に座っていても何も変わらないし何も会話が浮かばない。

そう思い立ち上がると、勇者は気持ちを切り替える意味も込めてお茶を淹れた。

その淹れたお茶をお互い飲みながら、とりあえずお互いの記憶の補正に取りかかったのだった。

「ほら、飲め」

そう言って差し出されたカップを受け取り口をつけた。

「ありがとう。あつっ」



「それにしても何の冗談だよ。俺の娘に元魔王が入ったなんて笑えねえ話しだぞ。おまけに俺がかつて討った魔王だと!? 冗談にしてはあまりにもひど過ぎるぞ」

などと勇者はぶつぶつ文句を言っていた。

すまない。私はそれに対する回答を持っていない。言ってもやれることがあるとすれば、運が無かったな、だけであろう。

実際その発言をした場合、勇者はきつと「元凶のお前が言うな!」と叫んだだろうが。

とりあえず話題を変えようと、一番気になっていた事を聞いた。

「そういえば、私が倒れてからどれくらいの年月が経ったのだ?」

この言葉に正気を取り戻した勇者は、だが言葉を躊躇った。

苦虫を噛み潰したかのような表情で、小さな声で答えを返す。

「……年だ」

あまりにも声が小さくて聞き取れなかった。

「え? 何年だった?」

聞き返すと勇者の手に握られたカップが異様な音を立てて軋んだ。

勇者の異様な様子に首をかしげて答えを待つ。

「50年だよ!!!」

黙って待っていたら、半ばやけくそのような返事が返ってきた。

聞いただけなのにそんな反応を返すことは無いじゃないか。それにしても切りのいい数字だな。

「ほー、お前は結構若作りなんだな」

とりあえず正直な感想を言ってみた。

すると、勇者の身体が大きく傾いた。

魔王が最後に直接見た勇者の姿から1、2歳ぐらい年を取ったか、

といった程度だ。

50年も経っていてこの若さである。どう間違っても、その一言で済ませられる程度ではない。

「……色々と突っ込みたい事はあるが、何より一番訂正させて欲しい事が一つある！この姿は、あの後、色々あったせいであって、若作りと言うものでは、決してない！！」

一言一言区切りながら力説していた。

「ふーん」

いまいち納得したのかどうなのか判断に悩む返事だった。

「じゃあ何でだ？」

この質問を返した瞬間、勇者の背後に黒いオーラのようなものが立ち上った気がした。

ふはっ、と突然噴出した勇者を訝しく思う間も無く次には、はっはっは、と暗澹たる気配を背負ったまま笑い出していた。

その姿をみて、魔王はどうやら非常にまずい質問をしたのだとようやく気付く。

「あのくそ忌々しい野郎のせいだよ。あの通りすがりの外見詐欺中身猛獣野郎が俺に不老の呪いを掛けたんだ。そのせいでどれほど苦労したと思っている。まったく人生計画斜め方向に曲がりきったぞ。俺が何をしたって言うんだ。何もしてねえぞ。ただ単に正直に質問に答えただけで気に入らないってどう言う意味だ。そのお礼に呪いつてありえねえだろ。本気で喧嘩を売ってやりたくても、もういないんじゃないでしょうもねえし。けどこの腹の内はおさまらねえ。くそっ。今だったら全力でかかりや何とか一撃でもお見舞い出来ただろうに。あの野郎人の隙について問答無用のこの呪いを掛け逃げしやがって。おまけに何だ。自殺でもしようものなら不老だけじゃな

く不死の呪いだ。と。どれだけ手の込んだ嫌がらせだ………」

尚もぶつぶつと何かを呪うかのように言い続ける勇者の姿に、魔王は思った。

何だが一筋縄ではない事情があるんだな、その若さについては。この事に関してはそつとしておいてやるのが優しさだ。きつと。

……と。

こんなこと考えている途中で勇者の「ジヴラ山を潰しただけじゃ」云々発言を聞いたがあえて聞かなかったことにする。

あの景観が美しい、と言われていた山が消えたのか、と思ったがあえてコメントは控えさせてもらおう。

あの山がただ景観ゝゝゝだけはすばらしい山だったとか、実情は魔物に支配され、さらには何も対策をせずに人が踏み入れる事は不可能な毒に犯された土地だったとか、そんな事は今となつては関係の無い話しなのだ。

さらに言えば、貴重な薬草が群生していた場所だったとか言う事

も……………今はもう、どうでもいい話だろう。

そんな事を考えながら、黒い空気を背負った勇者をそっと見つめつつ、お茶のお代わりを注いだ。

6 . あれから何年か…… (後書き)

だんだん文字数増えてきてる気が……。  
未だに一日目が終わらない。

7・勇者はキレた(前書き)

……いまいち調子がでません。  
そして未だ1日目が終わらない。

最終改訂 1 / 1 / 4

## 7・ 勇者はキレた

黒い空気を背負い、未だ何か遠くを見つめて呪いの言葉をつぶやく勇者を見つめながら思った。

私を倒した後、色々あったんだな　と。

私が存命だった当時はもう少し希望とか冒険心とか、こつワクワク感にあふれた人間だったようにも思う。  
旅に出たところを偶然見かけた事があったから昔の姿を知っているのだが、その当時と現在のギャップにちよつと涙を誘われた。

良くも悪くも『成長する』とはこついうことをいうのだろうか。

そんな事を考えながら、再び冷めたお茶をすすった。

「とりあえず落ち着いたか？」

「……………ああ」

魔王の問いかけに、勇者はうつむいたままだったがしつかりと返事を返した。

「それで、あの……話を続けていいか？」

お伺いをたててみる。あの黒い空気を背負ったままでは、おおよそまともな会話は望めそうにも無かったからだ。

深い深いため息を一つ。

するとそれまで勇者の背後で渦巻いていた黒い空気が、あらかた払拭された事に魔王は少しほっとした。

そして勇者はこちらを振り返り言った。

「それで、何が聞きたいんだ？」

「えーと。とりあえず、私は現在お前の娘なのか？」

「……そうだ」

直球でこられるとは思ってもいなかったので、思わず言葉に詰まったが何とか返事を返す。

「現在いくつ？」

「3歳だ」

「ここどこ？」

「ワジワール国の端っこにあるカリスタの村だ」

「？聞いたこと無い村だな」

思わず首をかしげた。

「そりゃそうだろう。あの戦いの後に出来た村だからな」

「そう、か……」

そう言つて突然黙り込んだ魔王に、今度は勇者が心配そうに声を掛けた。

「おい、大丈夫か？」

たとえ中身は魔王でも、突然黙り込んだ相手を心配するのは当然



の事だ。

「あ、ああ」

大丈夫そんな表情ではなかったが、それ以上の追求を拒むような雰囲気だった。

勇者はあえて追求することなくそっと離れ、のどを潤そうと冷めたお茶をすすった。

「ええ、と。それで、その……………あ！私が倒されてから50年も経ったのだっいたらお前の子供も私一人ではないのдар？」

「ぶふうつつ！！」

そんなに面白い質問だっただろうか？

盛大に噴出したお茶にむせ激しく咳き込む勇者の背中を、とりあえず私のせいなのだろうからさするうとしたが、いかんせん身長差がありすぎた事に気づき諦めた。

テーブルの上に乗ったたら出来ただろうが、行儀的にそれはいけないことだろう。

「大丈夫か？」

「がはっ、けほっ……………う、あ、ああ。げふん。まったく、なんて質問をするんだ」

勇者が落ち着いたのを見て、魔王は改めて聞いた。

「私はそんなに面白い質問をしたか？」

真面目に問われた勇者は、胡乱な目で質問に質問を返す。

「……………どうしてそうなるんだ？」

「だって人は面白い事があるとお茶を噴出すのだろ？」  
ひどく真面目に答えられた。

一つ聞きたい。どこから仕入れた知識ですか、魔王さん。

俺は決して面白いから噴出したんじゃない。予想外の上に聞かれたくない質問をされて驚いたから噴出したんだ、と言ってやりたか

つたがその問いには答えず、先の質問に答える事にした。

「その事はどうでもいいからほっといて、とりあえず俺には子供が13人いるよ」

「私を含めて？」

「そうだ。お前を含めて13人。生まれた子供は男ばかり。そして娘はお前が今入っているその子ただ一人だ」

「ほー。私はお前の唯一の娘だったのか」

待望の娘が、今では中身が魔王。

悪い冗談にしか聞こえない。

渋面を浮かべたまま、冷めたお茶をすする。

「他の子供達は何をしてるんだ？」

「あー……、一概には言えないが色々だ」

「例えば？」

突っ込んで欲しくないことを察してもらいたかった。

「……下は冒険者から、上は王宮の官職に就いてるよ」

「なかなか幅広いな。さすが、お前の息子たちだ」

よく分からない納得のされ方をされた。

こんな説明で何故に『さすが』と納得されたのか、微妙に納得いかないが……。

「で、お前は今は何をしているんだ？」

「色々だ」

裏で表で色々と手広くやっている。無駄に長い人生は歩んではない。

「ふーん。じゃあ何でこの村で暮らしてるんだ？」

「それは……だな」

勇者はそう言っつうなった。

「何か問題でもあるのか？」

「うーん、何といえれば分かるのかな。今はお前が入っているせいか

普通になっっているんだが、以前の娘は少し違っただ」

「どう言う意味だ？」

「あー、どう説明したものかな。今まで娘はただ生きていただけだっただ」

「生きてるのは別段おかしく無いだろ？」

「確かにおかしくは無い……っで違っ！」

「いや、えーと。お前は……じゃなくて、以前の娘はこれまで感情というものを発露した事は無かつただよ」

「？」

「まずまず首を傾げられた。」

「どう説明したものか、それ以上になかなか理解してもらえないことといい加減イライラしていた。ついでに言えばこれまでの会話も少々ストレスになっっていたのもあった。」

「結局、一言で言えば。」

「えーいっ！いい加減素直に理解しろ！！」

「キレた。」

「ええ！？」

「魔王にとっては理不尽なキレられ方だ。」

「生まれてからこの3年、娘は感情が表に出る事は一切無かつただ。待望の娘だっただけに、その事は非常に辛い現実だった。だからどうにかして普通の少女としての生活を送らせようと頑張った。この平穏な村に越してきたのもその一環だ。大きな街で暮らして心無い視線に晒されるより、この静かな村で暮らしていればいつかきつと笑ってくれるようになると思っっていた。それなのに、それなのに……」

がつくりと肩を落とし嘆く勇者の姿に同情した。

今は私が入っているが、待望の娘がそんな事情になっているのであれば勇者の嘆きも当然の事だろう。

そんな事を考えたが、その後の発言に即座にその考えを改めた。

「娘に『パパ』と呼んでもらう夢が、壮大なロマンがああ……！」

こんな事を言う勇者なんてドン引きだ。

というか、こんなのに倒された私も可哀相だ。

「私に謝れ」

激情のままに勇者を指差して謝罪を求めた。

「意味が分からんぞ、おい！」

「それにそんなもの私に求めるな！というか、そんな夢は海に流して別の誰かに拾ってもらえ！！」

「別の誰かに拾われたら俺の夢が俺の夢で無くなるじゃないか！それに純粹にかわいらしい存在というものが俺の周りにはあまりいなかったんだ。こんなところで夢を見たって良いじゃないか！！」

逆切れされた。

彼の発言に昔を思い出す。

そしてちょっと考えて、何故勇者がそんな切実な望みを持ったのか納得した。

とりあえず言える事は唯一つ。

彼を取り巻く仲間たちは一癖も二癖もある面々だった。

ただそれだけである。

7・勇者はキレた(後書き)

誤字脱字あれば報告よろしくおねがいます。

## 8 ・ 女神、登場！（前書き）

ようやくここまでたどり着けた……。

あと1話で1日目終了します。

この話だけで文字数が初期の話と比べて倍増しました。  
あれ〜？？

最終改訂 11 / 4

## 8・女神、登場！

「生まれた子供は男ばかりだった。唯一女の子だったのが今お前が入っているその子だ。何で取り憑いているんだ。というか何の嫌がらせだ！そこまでお前に止めを刺した俺が恨めしいのか！！」

涙目で訴えられた。

そんな悲痛に訴えられても、私にもこの状況はさっぱりなのだ。だがそれ以上に、まず訂正しなければいけないことがあった。

「いや、それに関してなんだが……どうも取り憑いている、という感じがしないんだ」

「どう言う意味だ？」

「他人の身体、という感じではないのだ。一つの身体に二つの意思があれば反発力が生じるだろう。だがそんな感じは一切しない」

「なんだって!？」

驚く勇者を見つめながら、魔王の脳裏に唐突にある考えが浮かんだ。

「まさかとは思うが……『神』が、絡んでいるのではないだろうか」

魔王のその言葉に、勇者が素っ頓狂な声を上げた。

「は？神ってあの神か!？」  
そして。

「呼んだ？」

その声は二人の頭上から突然降ってきた。



「だ、だれだ!？」  
「うをつ!！」

唐突に現れた存在に二人して驚きの声を上げる。

「誰かが私の噂をしてると思ってやってきたら、私のお探し二人組みじゃない。ちゃんと揃って居る……けど、なんだかサイズが予定と違ってない？」

現れた人物を簡単に説明すると、紫の瞳と金の豊かな髪を持つ妖艶な美女。

「……あなた、一体何しに来たんだ？」

勇者にとっては見覚えのある人物だった。人ではないが。

以前見た時はミニマムサイズで黒髪だったが、今回は等身大で現れた。こうしてみると創造神、という威厳はそこはかとなくある……と思う。

「威かな感じより艶なまめかしい部分が強調されているため、敬う気持ちにはあまりならないが。」

「お久しぶりね。どれくらいぶりかしら」

勇者にとっては無理やり祝福を押し付けられて以来である。

「50数年ぶりです。お久しぶりですね、創造神メルタシエーン」  
「え?ええ!？」

魔王だけは状況がさっぱり掴めず、何度も視線を目の前に立つ女神と勇者の間を往復させた。

「ど、どう言う事なんだ?」

「あら、そう言えばこの姿で貴女に会うのは初めてね。初めまして。私はこの世界を創り出した始まりの女神、メルティエリアよ。メルタと呼んで頂戴ね」

どこかうきうきした様に言われたが、妖艶な女性から発されるとちよつと違和感を感じる。

「は、初めまして。え」と……」

魔王は名乗り返そうと思ったが、今の自分の名前を知らないことに気付いた。この身体になったからには、以前の名前を告げるわけにもいかないだろう。

そんな戸惑いを察してか、女神はにっこり笑って言った。

「貴女はアリーシア。春の女神アリア<sup>あやか</sup>シエーンの名から肖った名前よ」

「そうなのか？」

そう問われて勇者は肯いた。問われなかったから今まで名前を言つて無かった事に、いまさらながらに気付いた。女神が何故彼女の名前を知っていたのか疑問に思ったが、突っ込んだ場合何かよからぬ事態が引き起こされる気がしたので沈黙を守った。

「で、貴方は……」

「俺はジェイルだ」

女神の言葉をさえぎるように勇者は名乗る。

……以前聞いた事のある彼の名前と、まったく違う名を。

「あら、それは偽りの名よ。神に偽りを告げる気。それでいいの？どこか楽しそうに言う女神に、勇者は逆に泰然と告げる。

「ああ。今の俺の名前はジェイルだ。いまさらあの名前には戻れないし、戻ろうとも思っていないからな」

「そう。当人がそれで言いというのならそれでいいわ。ジェイルにアリーシア、か。……いい名前ね」

そう言ってニコニコと笑い始めた女神に、二人は言い知れない予

感を覚えた。

「あなたたち、過去にあった大災害の事、知ってる？」

唐突にそんな事を聞かれ、二人は戸惑いながらも記憶をひっくり返してみた。

「うん？確かはるか昔に未曾有の災害に見舞われた、とかいった御伽噺があったような気が……」

「……何代か前の魔王が暴拳に出てこの世界の理をひっくり返そうとした、という話があったような」

大昔のあやふや夢物語と、数代前と記憶に残る出来事。

思い出の規模が違っていた。人と元魔王との寿命の差、といったところか。

「なんでその魔王はそんな事をしたんだ？」

「ん？いや、その魔王はな。愛した人が亡くなった事が許せなかったとかで、生き返る事を望んだんだと。それは当時の理では死者は生き返らない、というのが絶対普遍の事項だったんだが、その理を無理矢理捻じ曲げ、その末に何とか彼女を生き返らせる事に成功したんだ」

「ふーん」

「が、それには続きがあつてな。やっぱり無理やり捻じ曲げたせいもあってか生き返った彼女はその愛した魔王も分からない程変質した生き物に変わってしまった。そして魔王も自分のした事に気付き狂った。それがあの異変の簡単なあらましだ」

「規模でけえぞ……」

「そう。それでこの世界がそのゆがみを抱え切れぬほど軋んだせいで、未曾有の大災害が起こったの」

勇者のつぶやきはあっさり無視されたが、彼もそれを気にした風も無く続きに耳を傾けた。

「私もそれを何とかしようとかがんばったんだけど、それでも歪みは消しきれなかった。苦勞の末、何とか事態の収拾はついたけれど、それでもこの世界はかつて無いほど不安定になったのね。それで手っ取り早く事態回復を図ろうとして、生み出したのがあなたたち二人よ」

「は!?!」

勇者と魔王の声が八モる。

「ちよつと待て。それじゃ何でこんな事になってるんだよ!」

「こんなこと、と言いながら自分と魔王を交互に指差した。

「それがね。ちよつと失敗しちゃって、この子の魂を落つことしちやったのよ。見失った子を探して長い時を迷っちゃったんだけど、結局どこに落ちたのかさっぱり」

この子、と言って魔王の方を指差す。

てへっ、といった感じでいわれたが、内容はとんでもなかった。

そんな可愛らしく誤魔化す程度で済まされていい範疇を、大きく逸脱していた。

「一応神なんだろ。何ですぐに見つけ出せなかったんだよ」

「一応でなく立派に神です!だってどの時代に落ちたのか分からないかったんだもの」

どうやら時を超越した探し物だったようだ。そりゃ簡単には見つからないのは当然だろう。

「で、ようやく見つけたと思ったら何故か魔王をやってるじゃない。

もうシヨックだったわ」

シヨックを受けるほどの事だったようだ。

「そんなこんなしていたら、もう一つの方も色々あって結局落としてちやうし。その後偶然というか必然というか、何とかめぐり会ったはいいけど、どうにも收拾出来ない事態になってたから色々諦めたのよ」

諦めはやっ!!

「それであなたの後の人生はせめて幸せな人生を送ってもらいたくない、と思つて幸せになれるであろう場所に転生させようと思つただけなのに、なんでこんな事になつてるのかしら？後の伴侶の近くでもいいかな、とか考えたのがいけなかったかしら。それにしても、何でこんなミニマムなサイズで出会つてるのかしら？見た感じ将来はきつと絶対美人に成長するから、色々と期待してるんだけど……」

突っ込みたい要素はいっぱいだった。

「魔王、後は任せた」

あまりにも唐突過ぎる勇者の言葉に、魔王は驚き勇者の下に駆け寄つた。

「は？ちよつと待て。どこに行く気だ!？」

「頭痛くなつてきたからもう寝るわ」

そう言いながら頭を抱えて、そそくさと出て行くこととする勇者の服のすそをしつかりと掴む。

「待て!逃げるな!!私一人では荷が重すぎる問題だぞ!!!!」

「というか、連帯責任だ!運命共同体だ!!道連れなんだ!!!!という視線と力技で勇者引き止めた。」

「話は終わってないわよ。そこのお二人さん」

魔王の声に、勇者が逃げ出そうとしていたことに気付いた神は思

考を止め、二人を見つめていた。その雰囲気にも勇者も逃げられないと悟ったのかしぶしぶと、洗面を浮かべつつ元の場所に戻った。

そして、女神が次に発する言葉に二人は耳を傾けた。

「で、手っ取り早く事態を收拾するためにも、貴方たち二人の間に生まれた子供がこの世界をより良い繁栄へと導くであろう！ってことで、あなたたち。結婚なさい！！」

ビシィ！！という音が聞こえるような雰囲気指差された。

しばしの沈黙。

沈黙。

……………。

「ちょっと待てえええいつつ！！！！」

案の定、というかやはり叫んだのは勇者だった。

「あら何？」

「問題ありすぎだろうが」

「どの辺が？」

真面目に聞き返される。

あまりにも真面目に聞き返されたため、一瞬言葉を躊躇ったが勇者ははつきりと言った。

「あなた一応女神だろうが！！世界の神は、近親相姦はご法度と広く厳しく伝えて無かったか！？」

「一応では無く、しっかりと、この世界を創り出した女神です！それと、あなたたちに関しては最初に告げたとおり事情がちよっと違うのよ。だから私が神殿にうっかり神託を落つことだけで、世界は大歓迎で祝福してくれるわよ」

心のそこから楽しそつに告げられた。

## 8 ・ 女神、登場！（後書き）

次話では勇者に呪いをかけた人の事情にちよこつと触れます。外伝の補足みたいなものです。

なんて長い一日……というか、半日なんだ（ーー；）



9・現在の時間を思い出してください(前書き)

これにてよろやく1日目が終了です。

最終改訂11/4

9 ・ 現在の時間を思い出してください

その後。

神の神託により勇者とその娘は皆に祝福され、結ばれました。

そして未永く、幸せな家庭を築きましたとさ。

めでたしめでたし。

「……………てな話はどうよ。そのままいきたいけど一応近親相姦は私も禁止してるし、後々問題が発生する可能性が無いとも言えないから、とりあえず貴方達は義理の親子設定で。これなら問題なくい

けるでしょ」

そう言って力強く突き出された親指。その姿に後光がさしている。

「いけるかあああ〜〜っつっ!!!」

直後、勇者の叫びがそんな空気を切り裂いた。

「あ、正気に戻った」

あの直後、あまりの言葉に立つたまましばらくどこかへ旅立っていたようだったが、ようやく戻ってきたらしい。

勇者が立つたまま気絶している間に、壮大な御伽噺が一つ出来上がっていた。

「どんな話を捏造してるんだ!!!」

「あらいいじゃない。子供の親しんでいる童話も色々と改ざんをされた話なんだから、このくらいかわいいものよ。だってほぼ事実をそのまま書いてるだけなんだし、それを実行しようとしてるだけなんだから。大国の歴史書なんて自分の都合のいい話しか載せて無いでしょ。そんな捏造書物に比べたらほぼ本当の事しか書いてないんだからいいじゃない。それに勝者の言い分を、敗者には否定する権利なんてまったく無いんだから」

鬼のような理屈を説かれた。

「俺は敗者じゃない!!!」

「あら、ボロ負けしてたじゃない。そのせいで今の状況なんですよ」  
クスクス笑う女神に、勇者は顔を引きつらせた。

「まさ、か……見てた、のか」

思わず脳裏に蘇るあの屈辱の瞬間。

ただの通りすがりの普通の少年と違っていたら、一皮剥けば恐ろしい猛獣……という表現も生易しいと思える程の存在だった、という悪夢のような思い出。

「ええ。もう、じつくりと。思わず涙をぬぐっちゃうほど面白い見世物だったわね」

にっこりと笑いながら告げられた言葉に、勇者はこぶしを震わせながら耐えた。

こんな性格破綻したのが……とも思ったが口をつぐむ。賢明な判断である。

「本当に面白い見世物だったのよ。もう滑稽なぐらい彼の地雷を踏みまくった姿、そのせいでズタボロの姿にされた拳句、呪われて現在に至るまでの状況」

女神は魔王に向かってもうこれでもかと楽しそうに語り、その後ではその女神を睨み付ける勇者の対比に、魔王もさすがにコメントは控える事にした。あの勇者の黒いオーラは怖すぎて、再び見たいとは思わなかったからだ。

それ以上に気になる事はあった。この世界で最強となったはずの勇者を叩きのめすほどの者が、まだ存在していた事がどうしても信じられなかった。

「勇者を倒すほどの者が、いるのか？」

この言葉に、女神は苦笑しながら答えた。

「いるのではなく、いた、よ。彼は今、この世界には存在しないから」

「？意味が分からないのだが」

「彼は……とある事情で『世界』を巡り続ける人間よ」

人間、という言葉に激しく反応したのは意外にも勇者だった。

「なにいいい！！あれで人間！？何の冗談だ。あれで人間の括りにされたら、俺達はダンゴムシと一緒にゃねえかよ！！」

勇者の叫びに、女神も少しあきれたように言った。

「……ひどい偏見ね。まあ、この世界で最強となったはずの貴方を、あれだけぼろぼろにした人物を人外と思うのは仕方の無い事かもし

れないけれど。でもあれほどの力を持っていても、未だ人の括りにはいるのよ。彼は」

「マジかよ」

「ええ。でも彼はその力を疎んでいる。彼もまた平凡な人生を望んでいて得る事の出来なかつた人なのよ」

告げた女神の言葉の内容に、何かに気付いた勇者は嫌な予感を覚えつつ問いかけた。

「……………ちよつと待ってくれ。あいつも平凡な人生を望んでいた、って言つたか？」

「あら、ようやく気付いた。だから言つたじゃない。特大の地雷を踏んだつて。貴方が嬉そうに語つた事が彼に取つて特大の地雷も地雷。そりゃ八つ当たりされても仕方ないと思うわよ」

満面の笑みで告げられた言葉に、勇者が再び錯乱したのは仕方ないことだと思う。

自分の望みと彼の望みがうっかり同じだった拳句、現在の状況は相手に八つ当たりの嫌がらせをされた結果、なんてあまりにも悲惨過ぎる。

とりあえず私はこの勇者は怖いので、彼が落ち着くまで部屋の隅っこに避難させてもらった。

とりあえず勇者も落ち着いたが、現在の状況は膠着状態。

はつきり言って、もうどう收拾すればいいのか分からなかった。

女神は「貴方達二人がくっつけば万事丸く収まるんだから」と言  
って譲らず。

さすがにそれはどうかと思う。一応親子ですから。ついでに言え  
ば、私達の意味は丸つきり無視されています。

勇者は「娘は愛でて何ぼだ。ってか、神が自ら理を破ってどうす  
る!」と言って一歩も譲らず。

勇者。それはそれで、かなり問題発言だと思うのは私だけだろう  
か。

魔王は口を挟む隙の無い二人のやり取りに、ぼんやりとそんな感  
想を抱きながらその内容に耳を傾けていた。

この膠着状態に、女神もどうしようもないと判断したのだろう。

「む〜、じゃあ妥協案として……」  
そう言いかけた瞬間。

キュキュウ~~~~~……。

切なそうな音が二人の間に響き渡った。

「……………」  
「……………」

なんともいえない感じの二人の視線を受けた魔王は、お腹を押さえつつ身を縮め言った。

「……す、すまない」

そんな彼女の様子に、だが勇者は少し苦笑しただけだった。さらに言えば、どこかほっとしているような感じも受けた。

「いや。考えてみれば夕食の準備もしていなかったな。急いで食事の準備をしよう。じゃ、話はこれでおしまいだ」

そう言いながら魔王の頭をなで台所へと向かう勇者を、女神は呼び止めようと声を荒げた。

「ちよつと、まだ話しは終わってな……って、もういない!？」

あまりのすばやさ女神も言葉を失う。

「す、すみません」

しょんぼり、といった感じで謝る魔王に、女神は苦笑しながら言った。

「いいのよ。そろそろ引き際とっていたから」

……あの激しい舌戦で引き際？

「あ、はあ。そうですね」

本当に諦めたのか怪しいが、あまり突っ込まない方がいい気がする。

「これですんなり決まると思ってなかったから、別に気にしていないわ」

もしかして、まだ続くのですか?この問答……。

「そう言えば聞いてなかったけれど、貴女は彼の事をどう思っているの?」

「どうしては?」

唐突な質問に思わず首を傾げる。

「見た感じでは恨んではないみたいだけれど」

「ああ。そのことですか。勇者には感謝こそすれ、恨むような想いは一切ありませんよ」

「じゃあ好き？嫌い？」

さすがに、この質問の隠れた意図に気付かないほど鈍くは無い。

「さりげなく実行しようと思いませんか？」

「ちっ。やっぱりダメか」

「当たり前です」

「二人にこれ以上嫌われたく無いから本当にここら辺が潮時かしらため息をつくと共に小さく言った。

本当に諦めたのか甚だ疑問だったが、最後の一言と共に女神の雰囲気が最初のときより幾分和らいだ事に気付いた。どうやら本当に諦めてくれたのだろう、と思いを緩めたが、次に言われた言葉にしばし固まる。

「八割ぐらい本気でくっつけようと思ってたけど、これ以上ごねると逆に何しでかされるか分からないから今回は諦めるわ」

「は、八割!？」

今回は、という部分も気にはなったが、それ以上に聞き捨てなら無い一言である。これを聞く限り、ほぼ本気で実行しようとしていたらしい。

「あんまり勇者がごねるようだったら、残りの二割もプラスして本気で神託でも適当に落つこととして強制的にくっつけようとも考えてたんだけど、あれほどまでに鮮やかに逃げ出したって事は、バカでも勘は良かったみたいね。そんな心配おくびにも出さなかったはずなんだけどなあ〜」

最後の一言は小さい声だったが、だがしっかりと魔王の耳に届いていた。

「……………」



勇者、お前の危機察知能力は神にも認められたぞ。本気でお前のその神がかり的な勘には感謝する。

全てが終わった後、そう言えばと唐突にある事を思い出していた。

かつて私が魔王として在った時の事だ。

勇者を手っ取り早く鍛えようとさまざまな罠を用意した事があったのだが、彼はそれを意識的もしくは無意識でほぼ全て回避していた、という事があったことを思い出していた。

ただし、それは一人で旅をしていたとき、と限定される。

仲間たちが増えるにつれ罠にかかる確率が増えていき、最終的にはほぼ100%引つかかるようになっていた。

嫌がっているのを、無理やり仲間たちに引きずられながら連れて行かれる勇者。

ああ、哀れ、と涙をぬぐうフリをしながら肩を震わせたのは懐かしい思い出だ。

がんばって用意した罠（ご褒美付き）が無駄にならずに済んで、

嬉しかった思い出でもあった。

9 ・ 現在の時間を思い出してください（後書き）

……長かった。

それにしても『勘に感謝』発言。洒落のつもりは一切無かったはず  
なんだけどなあ。

心中、誰か察してください（前書き）

長らくお待たせしました。

サボっていたわけでは無いです。行き詰っていただけです。

心中、誰か察してください

前日の夕方から起こった、内容の濃い一幕に頭を抱えた翌日の朝。

勇者は一縷の望みをかけていた。  
全てが夢だったらしいな、と。

「勇者、おはよう」

にっこり笑顔で現れた娘のその一言に、なんともいいがたい思いのまま「おはよう」と力無く返したのは仕方の無いことだと思う。

念願だった娘の笑顔を浮かべる姿に正直喜びが隠せないが、内面が魔王というのが何ともいい難い。というか内心非常に複雑だ。

だが前日の騒動を考えると、日常の挨拶程度なんてはつきり言うて素直に喜ぶべき事なのだ。

娘とすっかり強制ゴールインなんていう、洒落にならない結末にならなかつただけでもましと思うべきなのだ。

目じりに浮かんできそうになっている液体は、あくびが出たから出てきただけであって、決して他の要因が混じっているわけでは無いからな。ちくしょっ！！

「少し待っている。すぐ用意する」

そう言って準備していた食事をテーブルの上に出した。

「美味しそうだ」

目の前に並べられた食事に、魔王は目を輝かせながら言った。

「昨日も思ったが、こんな美味しそうな食事を見るのは初めてだ」

これ、単純な一般的でありふれた朝食なんだが……。

それで美味しそうって、今までどんな食事を取ってきていたんだ

？

だが勇者は余計な突っ込みをする事はしなかった。うっかりそんな事をした場合、確実に食欲が減退する返答が来る気がしたためだ。

「まあいいや。早く食べ」

そう言って始まった食事なのだが、一体どんな会話をすればいいのだろう。

お互いがそんな事に頭を悩ませていたときだった。

「そっぴゃ、お前これからどうするんだ？」

「……私は追い出されるのか？」

勇者は何気なく聞いたつもりだったのだが、悲壮な感じで返事が返ってきた。

どうしてそうなる……、いや。俺が悪かった。確かに俺達二人の前歴を考えると、そうなるもおかしくは無いな。

おかしくは無いが……娘にそんな風に考えられていたと思うと、地味にへこむ。

「違う。この食事が終わった後お前は何をするんだ、という単純な話だよ」

その言葉に魔王は、ふむ、と首を傾げ……………。

「勇者。重要な問題が一つあるのだが……………」

10数分近く悩み続け、先ほどの問いに對し返ってきたのは困惑した表情と問題が一つ。

「何だ？」

「私は一体何をすればいいのだ？」

その言葉に思わず魔王の方をまじまじと見つめ、ポン、と手を打ちした。

昨日、三人で夕食を食べながら簡単に話しを聞いたのだが、魔王の意識はあの戦いの直後あたりで途切れているらしい。

三人、という所で察しのいい人間は分かっただろう。

あの女神、あの後何事も無かったかのようにしっかりと夕食をこ相伴に預かって帰っていった。

結局何しに来たんだ、とも思ったが、それを聞いた場合どうも嫌な予感しか無かったので結局何も聞く事はしなかった。

ちなみに、神なのだから食事をする必要の無い存在なのでは。

そう考えて聞くと、それはどちらでも可能なのだそうだ。食事で糧を得る必要性は無いが、楽しみの一つらしい。

様々な神が生まれたおかげで、私もようやく自由が満喫出来るよ

うになったのよ。だから色々楽しんでるの。姿を変えてあちこちに出没してみたり、とか。食事もその楽しみの一つよ。味もすっかりばっちり分かるから食べ比べが楽しくて……とか言っていた。フリーダムな創造神だ。

ついでに、隠していたはずの俺の酒も何本か胃袋に処分して行った。

俺の秘蔵の酒、返せええっつ！！

話が逸れた。

とにかく、気付けば俺の娘へと転生していたらしい。

目を開けると長閑な風景が広がっていた、なんてのんきな感想が返ってきたのには少し呆れもしたが、そんな感想を抱いたのは、おそらく突然の状況変化に混乱していただけなのだろう、とあたりを付ける。

だが、この展開には多少複雑な思いもあるがお前もいるからそれほど困った状況では無いな、とよく分からん信頼を寄せられたのは謎だ。

なんだか楽しそうだ、と笑っていたのもさらに謎だった。

まあ、諸々気になることとかもありはするが、とにかく、魔王も突然こんな事になったのだ。何をすればいいのか思い付かないのも当然の事だろう。

それ以上に、俺も娘が今までどんな事をしていたのかはつきりと把握していなかった事に、今更ながらに気付かされた。いや、娘の行動は大まかには把握はしていたが、普通のこの年頃の娘が何をするのかをまったく知らない事に気付いた。



娘のこれまでを思えば、連れて行ってうっかり逸れたりすると、それは恐ろしい事になりかねないからだ。彼女の外見は、それなりに整った顔かたちをしているから人攫いにあったりするかもしれない。

そんな事になると、うっかり手加減を間違えると街が一つ地上から消える。

それに俺の仕事の関係上、危険な場所にちよくちよく行ったりしていたから、そんな場所に彼女を連れて行くわけにもいかなかったのも理由の一つだ。

うっかり娘が人質にでもされた場合、その場所が更地になる危険がある。

そんな事を考えながら、何をしようかと頭を悩ませ始めた。  
自分の予定も念頭に置きながら。

そして……。  
魔王にとってはあの戦いの後（？）なのに、何故俺と普通に接していられるのだろうか？

そんな疑問が脳裏を掠めつつも、朝から唐突に降ってきた最大の  
問題、『この後どうしよう』な事態に頭を悩ませるのだった。

心中、誰か察してください（後書き）

先に書いていた部分を付け足すと、尋常では無い長さになるためこの辺で切る事に。

中途半端ですみません。

魔王の料理教室(仮)(前書き)

あまりにも長すぎたため、前後編に分けました。

## 魔王の料理教室（仮）

とりあえず自分が悩んでも仕方ない事に気付いた勇者は、率直に聞いた。

「お前は何がしたい？」

「何が、と言われても……」

そう言っただけで顔をして唸り始める。

勇者はそんな魔王の姿を見ながら、当然の反応かと納得していた。「そりゃそうか。外で遊ぶ、とか言ってもどういふ事をしたいのかわからないし、それに家の中で何かをする、と言ったら掃除か料理ぐらいだしな。包丁の扱い方一つ知らないだらう元魔王に料理なんて無理だしな」

勇者がそんな事を呟いていると、ある部分に魔王が反応した。

「ちょっと待て、勇者。私だって包丁の持ち方くらい知っているぞ」自信たっぷりなその様子に少し意外な気がしながらも、ならばと思ひ提案してみる。

「ほお。じゃあその腕前を見せてもらおうか。ちょっと待ってる。片付けを終わらせて来るからな」

そう言っただけで食器を片付け始める勇者。手馴れた様子で手早く片付けるその姿を、魔王は感心したように見つめた。

後に勇者はそんな事を言った自分を後悔した。

いや、問題が先に発覚して良かったと言うべきか。

どちらにしろ彼は一番最初に聞いておくべきだったのだ。

料理をした事があるのかどうかを。

そうすれば、あんなことにはならなかったのだ。

……………たぶん。

台所に椅子を一つ用意する。

魔王の現在の身長を考えると、足場が無いと台には届かないからだ。

最後に魔王と相対した時は、彼の方が頭一つ分くらい高かったのが羨ま……ガフンゲフン。なんでもない。とにかく、背は高かった。それだけだ。

「おい、魔王。準備が出来たぞ」

「わかった」

そう言っただけで程なくして現れた魔王の姿に頬が緩む。

彼女はフリルの付いたエプロンを着ていた。

というのにもかねてから勇者は、娘と何時かは一緒に何かをしようとして準備だけはしていたのだ。念願の夢が一つ、今日叶ったのだから何もいう事は無い。

中身云々は見えないふりだ。今だけはそれは無視できる。フリルエプロンに笑顔を浮かべる愛らしい娘の姿だけでももう十分だ。

「勇者。お前から不穏な空気が感じられるんだが……」

半眼で見つめられていたことに気付いた勇者は、慌てて表情を取り繕い言った。

「お前の今の身長では届かんからな。そう思って椅子を用意しておいたよ」

無理矢理な話しのそらし方だったが、指し示された椅子を見て魔王は驚いたように言う。

「勇者は気が利くな。それに料理の時も思ったのだが、ずいぶんと器用だな」

「そりゃ長期一人旅もしていたし、今までも色々と一人でやってきたから手際だけは良いさ」

へー、と感心したように言いながら、台所にあるものを興味深そうに見つめる魔王の姿に勇者は一瞬おや、と思ったが何が引っかかるのか分からずあえて何も言わなかった。

しばらく台所の内部を探索して満足したのか、ようやく魔王は椅子に登る。

「靴のままでもいいのか？」

「ああ。それは基本踏み台としてあつた物だったから問題は無い」

一段視界が上がると、また見えるものの形が違っていて魔王は面白そうにあたりを見回していた。

そんな魔王のほほえましい姿に、勇者も「そろそろいいか」と声を掛けた。このままの様子だと何時まで経っても料理に取りかかれそうに無かったから。

「ああ、すまん。台所というのは色々もあるものなのだな」

感心しきつた魔王の感想に、勇者は逆におや、と首を傾げた。

包丁の持ち方を知っているのであれば、台所にも入った事ぐらいあるだろう。

そんな疑問を持っていると、聞き捨てなら無い一言が耳に入ってきた。

「料理は一度もした事は無いが」

その小さな呟きにも似た一言を聞いて思わず魔王の顔を凝視したが、彼女は気付いた様子も無く包丁を手に取る。

「確かこう、逆手に持って……」

その時点で色々と間違えている。

ちょっと待て。そう言う間もなく魔王の行動は滑らかに動いていた。

「食材にそのまま振り下ろす」

そう言っただけで振り下ろしたので、包丁は食材を突き抜けてまな板に景気よく突き刺さっていた。

「包丁の正しい使い方はこれでいいのさ？」

そういつて振り返った魔王の表情は、やりきった感が満ち満ちている笑顔だった。

「……………」

反対に勇者は、思わずうめきながら目元を押さえた。

期待したのは食材をただ切るだけの行動だ。それなのに何故あれなんだ。

誰がいつ、嫉妬に狂った女の怒りを表現しろと言った、と言っただけでやりたい。

だが何故に、一瞬返り血を浴びたような幻が見えた気がしたんだろ。そんな幻影を見るほど疲れた覚えは無い。さらにいえば、そんな凄惨な幻の中でも満面の笑みなのは何故だ！

「勇者？」

「あー、うん。それを教えてくれた人物の事をぜひ教えてもらいたいんだが、その前に、本気でそれが正しい持ち方と習ったのか？」

「そうだぞ？これが正当な持ち方じゃないのか？」

欠片ほども疑っていない。

そんな風に振り下ろして、どう食材を切り刻んでいく気だ。

はつきりそう突っ込んでやりたい。反面、本人は至って真面目でありやる気はあるのだ。

だがこのままの勢いでいけば、きっと包丁を刺したまま鍋に投入されかねない。

そう考えて口を開こうとした瞬間、魔王はまたもや尋常では無い行動を起こしていた。

「そう言えばもう一つあったな。ここの柄の部分を手をすばめて覆うように持ち、親指をそつと添えて……」

嫌な予感が……。

「ちよ、ま……」

「構えて、確か掛け声は………投擲!!」

待てと言つ間もなく、包丁は魔王の手から飛び出していた。

……………。

直後、二人の間にただ沈黙が横たわる。

勇者の手には、先ほどの掛け声と共に投げつけられた包丁が。その額にはくつきりと青筋が浮いていた。

一方魔王の方は、予想外の結末に引きつっていた。

「あれ？」

勇者は手に持っていた包丁を静かに置くと、口を開いた。

「魔王。一ついいか」

勇者の平坦な声に魔王は身を縮め、はい、と返事をするつもりだったが、思いもかけず舌がもつれ「ひゃい」と言ったのは仕方ないだろう。それはそれでかわいらしいのだが、現在怒り心頭な勇者にそれは通用しなかった。

魔王の方も、勇者の怒りが相当ある事だけはしっかり理解出来た。勇者の背後に、微妙な黒い気配が漂っていたから。

「とりあえず、正しい包丁の使い方学ぶまで、お前は刃物の使用は絶対に禁止だ。分かったな」

「はい」



しょんぼりと、魔王は返事を返す。

とりあえず、これで殺人事件は未然に防げた……。

正直、勇者の考えはこれ一つに尽きた。

## 料理の裏話（前書き）

後編です。前編は一つ前です。

## 料理の裏話

「あの包丁の持ち方は本で読んだんだ」

「どんな本なんだ」

誰だよ、そんな危ない本を書いたヤツ。

「確か題名は……『正しい男の仕留め方』だったっけ？あ、違う。

『正しい男の射止め方108選』だ。間違えた。たしかあの包丁の持ち方は……何だっけ？何かの表現方法応用編、だった気がするんだが……」

『し』と『い』、一文字違うだけで大きく意味合いが違ってくる。単純な意味合い的には似たり寄りたりだが、他の意味も考えると大きく違う。

された行動を思うと、仕留める方でも間違いでは無い気はするが……。

「何でまたそんな本を読んでるんだよ。お前、前は男だっただろ」  
題名を聞く限り、どう考えても男の読むような本では無い。

「いや、それがな。配下の一人に、『陛下は女性の心情をまったく理解されておりません。これでも読んで女性の機微に気付く努力をなさってください』って怒られてな」

どれだけひどかったんだ、と思わず突っ込みそうになった。

「それにしても、本の内容はかなり恐ろしいものだったんだぞ」

恐怖に震えるかのように言った魔王の言葉に、勇者は首を傾げた。

題名を聞く限り、それほど恐ろしい話でも無いと思うんだが……。

「一番悲惨だったのが、男を捕まえるためにまず胃袋を掴めという項目だ。そんな血みどろの状態で男を捕まえて、その後は一体どうするんだろうとしばらく悩んだものだ」

……どうやら、理解するほうに問題があったようだ。

「あー、魔王。それは意味がちょっと違う」

「それにあの包丁の持ち方だろ。確か項目は……正しい喧嘩の仕方だったっけ？ああ、そうだ。最初の持ち方は真夜中の喧嘩の仕方、応用編に載っていたんだ。そう言えばそうだったな。私たちは喧嘩をしているんじゃないからあの持ち方は正しく無かったな」

ちよつと待ってくれ。確か、今回俺は料理をするだけだったはずだ。包丁は料理に使うためにあるものであって、人間を捌くために使うものではない。それ以上に、普通に喧嘩をする場合にもあんな危険物は普通は使わない。使った場合、確実に殺人事件に発展する。「二つ目の持ち方の方は……ええと、確か何かを退治するとき……えーと、そうだ。とっさの賊の対処法第5項だ」  
その1〜4項目がどうなっているのか微妙に気になる。

「正直、どこから訂正して良いのか分からんぞ」  
思わず天を仰ぎ、うめくように言った。

しばらく後。

何とか気を取り直して、勇者には一番聞いておかなければいけないことがあった。

「その本の著者は誰なんだ？」

魔王が読んでいた、というのであれば50年以上経過している。それならばその本はもう出版終了しているだろうし、それ以上に作

者もいないだろう。だがもし、と言う場合がある。そんな危険書物をは即刻処分してもらう必要があった。

「えっと、確か著者はリヴィツ・エイワークだったかな。男が書いているのに女の心情の機微に詳しいって」

その名前を聞いた瞬間、勇者の顔に笑みが広がった。黒い、笑みが……。

魔王はそんな勇者を見て、顔を青くして部屋の隅に逃げ出す。

勇者の脳裏に描き出されるのは、魔王を倒すためのあの辛く厳しい旅の最中での出来事。

素敵な人ねと絡まれ、良いお尻ねとなで回され、私の愛を受け止めてと襲われかけ……。

そしてあの戦いの後は、名残惜しいわと再び襲われかけ、呪われた後に出会えば若さの秘訣は！？と激しく問い詰められ……。

どれもこれも、あいつに関わる話しに碌なものは何一つ無かった。

そして

止めとばかりに、今回のこの出来事だった。

あの問題だらけのカマ野郎がっ！

………よし。責任持ってヤツを殺ろう。

そう考えて握りこぶしを握りながら凄惨な笑みを浮かべる勇者の

姿を、魔王は椅子の陰からそつと見つめていた。

数日後。

夜中のとある街中。

突如として悲鳴と怒声が響き渡る。

その声は「お前のせいだ」とか「何をしたって言うのよ〜」などという激しい言い合いと物が壊れる音が響き渡っていたそうだ。

後日。

新聞の隅の方に、小さく記された事件が一つあった。

女性に人気の作家が自宅で暴漢に襲われた、という記事だった。

だが彼はそれを大事にすることなく、真相にも口をつぐんでいたそうだ。

ぼろぼろの姿だったが、それに反するかのようにその表情はどうか満足げだった、と近隣の者は語ったそうだ。



## 料理の裏話（後書き）

話しの進みが激しく遅いです。

これでまだ二日目……。。

次話はまだ少し日を進めたいと思います。



## 12・外出前の注意事項

料理と称した殺人事件（未遂）から数日後。

この数日間、勇者は魔王にもつぱら家の中で出来る事の一般常識をただひたすら教え込んだ。

掃除に洗濯、炊事に至るまで。

一応基本はあらかた教えることが出来たと思う。結果はおいおい追いつくものだとは判断して。

そして

それぞれのイベントは網羅した、とここに宣言しておこう。

掃除は、水浸しから始まり物は落として落ちて壊れて果ては再起不能。家が壊れなかつただけでもう十分だ。

洗濯は、泡だらけから始まり泡をかぶり水をかぶり衣類を襪褌切れにし、干す段階には風の精霊がお茶目を起こして布と一緒に飛んで行きかけ……。ここまで忙しい洗濯は初めて経験したよ。

炊事に関しては……。

これに関しては最重要課題だった。これこそ重点的に教え込んでおかないと、きっと必ず将来的に確実に殺人事件が起きる。というか、俺が真っ先に殺される。

何も知らないのお茶の入れ方から始まり、料理の基本である道具の名称から切り方まであらかた教えた。

……一部正式名称を知らず使っていた道具もあったのだが、それ

をしつこく追求されて最終的に知らない知られた時には微妙にへこんだが、魔王も知らないのだったら仕方ないな、と素直に納得していた。最初から正直に話せば良かったのでは、と再び落ち込んだ話はもう思いだしたくも無い。

切るに関しては食材コロコロゴロゴロ逃亡イベントに始まり玉ねぎ涙腺崩壊など、味付けに至っては熱い冷たいから始まり辛い苦い甘いも一通りやった。と言うか、味わった。味付けであれほど死にそうになったのは初めて……ではないな。これはまだましな方だ。旅していた当時、もっとひどい目にあつた思い出があつた。そいつの料理では、最終は毒草から雑草までこつた煮されていた。あれに比べるとまだましに思える。あれは死にそんな目ではなく、実際死にかけてたから。

ひとまず魔王は、お茶ぐらいなら普通に入れられるようになった。時折実験と称して変なものを入れない限り、普通に飲める物が出てくるぐらいには進歩した。

とりあえず、現状はこれぐらいで満足しておこう。

今までは家の仕事を一通り教え込んでいたが、もうそろそろ外に目を向けてもいい頃だろう。何時までもこの家に閉じこもっていても何も始まらないから。

そう思い、思いきって提案した。

「魔王。そろそろ外に出てみないか」

「外には出ているが？」

そう言うと思っただよ。洗濯物を干すために出ているが、今回はそういう事では無い。

「違う。村に出て人と会って見ないか、という事だ」

「……………」

率直に言うと、その言葉に不安そうに顔を翳らせた。

「……………」あー、何を考えているか大体想像が付くが、そんな不安は抱える必要は無いぞ。以前はどうであれ、今はれっきとした俺の3歳の娘なんだから普通にしていればいいんだよ」

そう言っただけで乱暴にその頭をなでると「痛い」と言っただけで手を振り払われたが、その表情にはそれまでであった翳りは少しだけ薄れていた。

「一緒に付いて行ってやるから」

その一言が決め手だったようだ。

「行く！」

小さくとも、しっかりとした返事が返ってきた。

「ちょっと待て」

家を出る前に、どうしてもやっておかなければいけない事がある事に気付く。

「ん？何だ？」

「その瞳の色を誤魔化しておかなければいけないんだ」

「何か問題でも？あれ？色を誤魔化すという事は、もしかして私は紫色の瞳をしているのか？」

さて、ここで一つ説明しておこう。

『紫の瞳』。これは神の持つ瞳の色である。

この世界において同じように『紫の瞳』をもつという事は、一番分かりやすい形での神の祝福を受けた証である。それも最高の祝福

を受けたという証なのだ。

『神の祝福』。これは幾多の神々が気まぐれに、地上に生きる生物達に与える祝福のことだ。恩恵の形は様々で、身体のどこかに不思議な文様が浮かんだり、道具を渡されたり。だが至高の形は上記に記した通りで、神と同じ色を与えられる。

この祝福と言うものがどれほどその身に恩恵を与え、そして反面どれほど有り余る力なのか。例として、与えられた祝福の力によってその者の住む大地は肥沃に富み大きく栄えた国がある一方、その力のせいである一帯が平地になったという逸話が残されていた。力によって滅ぼされた国も存在するという。神に与えられたと言われる道具もいくつか地上に残ったままなのだが、本来の使い手が亡くなった後、力に目が眩んだ者が使い方を誤って自らの国を滅ぼした、または草木も育たない大地が広がったという話はいくつか残されていた。実際、世界には何箇所か『災禍』と呼ばれる草木も育たない場所が存在する。そこは目に見える形で残された愚かな者達の末路と墓標と言えるだろう。

生物達に与えられたであろう神の力の片鱗と、その誤った使い方をした者達の末路はご理解いただけただろうか。

そして先日発覚したのは、二人がこの世界を創り出した神に関わりがあった。それも生まれる前から。

それならば祝福を受けていてもおかしくは無いだろう。

「そうだ。これまでは普通の色をしていたのにお前が入ってから瞳の色が変化したんだ。このままだとこの村は大騒ぎになる」

瞳の祝福を受けるのは、それほどまでに稀なのである。

「そう言えばお前も同じ祝福を受けているはずなのに、何故瞳の色は翠なんだ？」

「ああ。これは光で誤魔化してるんだよ」

「そうか」

と行って無造作に何かをする気配を感じた勇者は驚いた。

「ちよつと待ていっ!!」

思わず叫んだのは仕方ないだろう。

無造作に光の魔術を使う元魔王が目の前にいるのだ。

「ん？何だ？」

そう言っただけ振り返った魔王の瞳の色は、自分と同じ翠に変化しているのではないか。

「何で元でも魔王が光魔法使ってたんだよ!!」

「ああ、そのことか。もともと私は全属性の魔法は使えただぞ。イメージ戦略、とかで使えなかったように見せていただけで」

にっこりと満面の笑みで答えられた。

「それにお前もそうなんだろ」

まさか。

「知って、いるのか？」

「ん？お前も全属性の魔法が普通に使えることだろ。知ってるよ」  
さも当然のように答えられた。

確かに、勇者が闇魔法を使えるなんてイメージが悪いから隠しなさい、と仲間に怒られた思い出があった。同じように印象が悪いから、という理由で。

あつたのだが、自分同様出鱈目な存在が目の前にあると、これよりはましでは、と思ってしまうのが人間の深層心理である。第三者から見れば同じであろうが。

『あんなね。仮にも勇者でしょ。それなのに得意魔法の属性が光と闇って、冗談言っているんじゃないわよ。百歩譲って光は何とか納得しても良いけどそれでも常識つてものを弁えて……って、え？本当なの！？ならなおの事悪いわ!!せめて得意魔法は四属性全て、ぐらいに言っておきなさいよ。どこまで出鱈目なのよ。四属性全て

っただけでも珍しいのに、それを統べる天の二柱属性を得意とするなんて、はつきり言ってバカじゃないの』

散々言いたい放題言われ、ついでとばかりに散々しばかれた。そしてそれは後々まで引きずり、事あるごとに散々言われしばきながらも……一番利用していたのは彼女だった。

とにかくこき使われた、苦い思い出だった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4493w/>

---

魔王と勇者と彼らのその後

2011年11月26日01時47分発行